

「画像診断のための知っておきたいサイン」 第2版

慶應義塾大学講師・放射線科 甲田 英一
 東京都済生会中央病院・放射線科部長 古寺 研一 著
 慶應義塾大学教授・放射線科 平松 京一

群馬大学教授・核医学科

遠 藤 啓 吾

レントゲンがX線を発見して100年余り。昔は画像診断と言えば、胸部、腹部、骨などの単純X線が主であった。近年、X線、CT、磁気共鳴画像(MRI)、超音波画像(US)、核医学(RI)など、多くの画像診断機器が開発された。これらの機器の内部はコンピュータそのものなので、コンピュータ技術の発達に伴って、画像診断の進歩もとどまるところを知らない。まさに画像診断花盛りなのである。

画像診断の対象は文字通り“頭のてっぺんから足の先まで”。しかも単純X線、CT、MRI、US、RIなどの画像診断機器を駆使しなければならない。画像診断に携わる医師も勉強が大変なのである。

どのようにすれば画像診断の読影に習熟するのか？どうすれば検査を指示した主治医は、読影レポートを正確に解釈できるようになるのか？

画像診断に上達する近道の1つが、画像上の特徴的なパターンである“サイン”を知ることである。この画像における“サイン”を頭の中にイ

ンプットしておかないと、正確な診断を下すことはもちろんのこと、的確な鑑別診断をリストアップすることはできない。

胸部X線での“シルエットサイン”や腹部超音波検査での“pseudokidney sign”などは有名で、聞いたことがあると思われる。

本書は慶應大学医学部放射線診断科の3人の共著である。1983年に第1版が出版されたものが、今回画像診断の進歩に合わせて、全面改訂された第2版として出版された。

画像診断は進歩が目覚ましいため、時間とともに写真、画像が古くなるように感じられ、問題が生じ、本のサイクルが短いのが普通である。本書が版を重ね、ベストセラーの1つとなったのは、サインの説明に写真でなく“シェーマ”を用いたことであろう。政治家の記事でも写真よりもむしろ似顔絵のほうが特徴を表しているのと同じかもしれない。ただこのように画像所見の特徴をよくつかんだ“絵心”が3人の著者にあるとはこれまで知らなかった。

このような“サイン”はほとんどが欧米で発表されたものなので、本書でも原語の表記となっている。ただどのように発音するかが書かれていない。“Silhouette sign”が“シルエットサイン”のことなのはわかる。“Coeur en sabot”は先天性心疾患ファロー四徴症に伴う胸部単純X線写真で、心大血管陰影が木靴状を呈することなのだが、発音はどのようにすれば良いか、本文中に書いてくれたほうがありがたかった。そのほうが仲間に知識を披露し、権威を高めるには役立つ。逆に間違っただけで発音すれば、浅はかな知識がバレてしまいかねない。

値段も手ごろで、サイズもコンパクト。しかも2色刷りなので見やすい。

画像診断に携わる医師や診療放射線技師のみならず、画像診断を指示する医師にもぜひ手元に置いていただきたい本である。

● A5 頁262(全頁2色刷り) 図213
 1997 定価(本体3,800円+税) 7400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)